

悔しさを糧に 光星10度目の夏

▼上▲

第101回全国高校野球選手権青森大会で八学光星が2年連続10度目となる夏の甲子園の切符をつかんだ。決勝までの6試合で15本塁打、72得点と、圧倒的な攻撃力を武器に頂点へ上り詰めた。その鮮やかな勝ちっぷりは、ナイン一人一人が春に味わった悔しさを教訓にチーム一丸で努力した成果だった。

■ 全国高校野球選手権青森大会決勝で3季連続の聖地行きを決めた武岡龍世主将は23日の試合後、今春のチーム状況について、こう振り返った。「それまで積み重ねてきた自信を失い、チームがばらばらになりかけていた」。

■ 昨秋の東北大会で優勝してつかんだ今春のセンバツ。自信を胸に挑んだ初戦だったが、結果は好投手を擁する広陵（広島）に散発3安打での完封負け。5番として3三振と振るわなかった大江拓輝は「全く歯が立たなかった。今のままでは駄目だと思った」。さらに、チームが「どん底」（武岡主将）を味わったのは、春季青森県大会での初戦敗退だった。相手は昨秋の県大会

勝負の夏へ練習強化

二つの敗戦、失った自信



でゴールド勝ちしていた青森山田。光星は先発投手を攻めあぐね、守りのミスも絡んで失点を重ねる屈辱を味わった。中堅の島袋翔斗は「相手

粉々に打ち砕かれた。夏のシード権も失った。仲井宗基監督は「チームをもう一度強化しよう」と、ナインにハッパを掛けた。令和最初の夏に頂点をつかむために、逆襲に向

ついでながら送球がされてしまいいながらアウトにできな

けた戦いが始まった。春季県大会での悔しさを忘れないため、選手が生活する寮のテレビで常に青森山田戦の映像を流した。選手は寸暇を惜しんで映像を見て投手陣の配球や塁上での走塁の癖など、ライバルを徹底的に研究し、「打席でラインぎりぎりまで内側に立ち、相手投手に圧力をかけることの大切さが分かった」（武岡主将）。

純粋な練習量も増加した。大会前までに約1週間程度行う通常練習後の「強化練習」を、今年は倍の約2週間実施。野手は守備や打撃などそれぞれの課題克服に、投手陣は下半身の鍛錬に取り組んだ。

さらに春季県大会後は走塁練習にも時間を割いた。より隙のない攻撃を実践するためだ。「相手にやられたら嫌な動きを学んで相手に圧力をかけ、さらには、その動きを敵にさせないための守り方も学ぶことができる」と仲井監督。勝負の夏へ向けて、着々と準備を整えていった。（林泰輔）